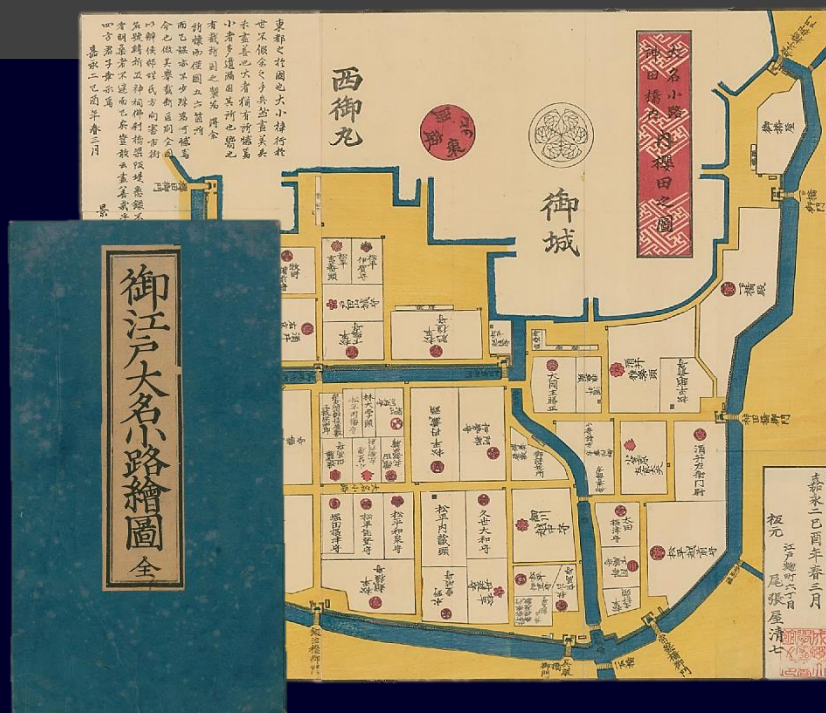


— 街に残された知られざる痕跡を探してみませんか？ —



江戸切絵図

[エド キリエズ]

[近吾堂板(近江屋板)]

出版:近吾堂

出版年:嘉永2－嘉永5 (1849－1852)

出版地:江戸 (日本)

[尾張屋板(金鱗堂板)]

出版:尾張屋清七

出版年:①嘉永2－文久2 (1849－1862)

②嘉永3－元治1 (1850－1864)

出版地:江戸 (日本)

江戸市中を狭い範囲に区切り、細かい道筋や大名・旗本などの屋敷が人名付きで記された携帯用の「区分地図」である。宝暦5年（1755）に刊行が開始され、携行に便利なため、庶民の間に広く普及した。基本的には実測図ではないので、建物の大きさなどは正確でないことがある。一般に江戸切絵図とは、登場した順番に古文字屋板、近吾堂板、尾張屋板、平野屋板の四種類を指すが、江戸全体をカバーしたのは近吾堂板と尾張屋板で、特に有名なのもこの二つである。当時、江戸の住人の半分は武士で、その中の多くが参勤交代で国許から来ており、また商人なども地方から来る者が多く、江戸には常に大量の流入人口があった。そうした人々にとって切絵図は非常に便利なものとして親しまれた。また切絵図は実用品として用いられるだけでなく、多色・寺社の絵画的表現など錦絵風の親しみやすさから、浮世絵などと並んで江戸土産としても重宝された。

[近吾堂板(近江屋板)]

請求記号:291.36/E24 資料番号:2009300032

[尾張屋板(金鱗堂板)]

請求記号:291.36/E24 資料番号:2009300031

請求記号:291.36/E24 資料番号:0000423132

— 街に残された知られざる痕跡を探してみませんか？ —

江戸切絵図

[エド キリエズ]

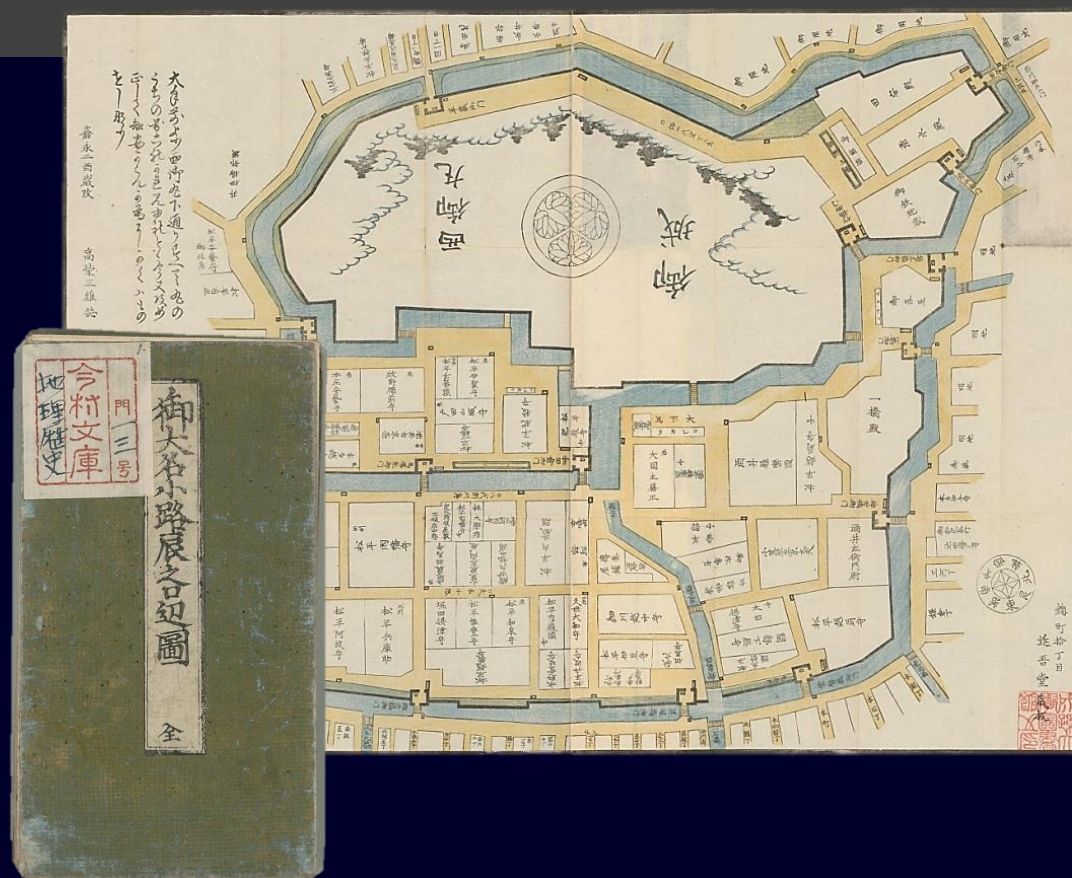
近吾堂板 (近江屋板)

出版:近吾堂

出版年:嘉永2－嘉永5 (1849－1852)

出版地:江戸 (日本)

折畳仕立て 31舗 15.0×8.0 cm (折畳)



麴町十丁目にあった荒物屋の近江屋が弘化3年（1846）から刊行を始めた地図。堂号は近吾堂、屋号は近江屋で、近吾堂板とも近江屋板とも呼ばれるが、近吾堂板の方が一般的である。近江屋があったのは四ツ谷御門（現在の新四谷見附橋）のすぐ近くで、これは武士の住居地である番町の入り口にあたる。江戸時代には表札を出す習慣もなく、また、番町のような屋敷街では目印になる建物などもなかったため、来訪者が目的の屋敷に簡単にたどり着けなかった。近江屋はもともと地図・出版とは無関係であったが、来訪者からひっきりなしに道を聞かれるため、説明のために番町の地図を作ったところ、人気を博したため、販売を開始した。近吾堂板はやがて31枚（のちに数が増えて38枚）の地図で江戸全体をカバーするに至る。

— 街に残された知られざる痕跡を探してみませんか？ —

江戸切絵図

[エド キリエズ]

尾張屋板 (金鱗堂板)

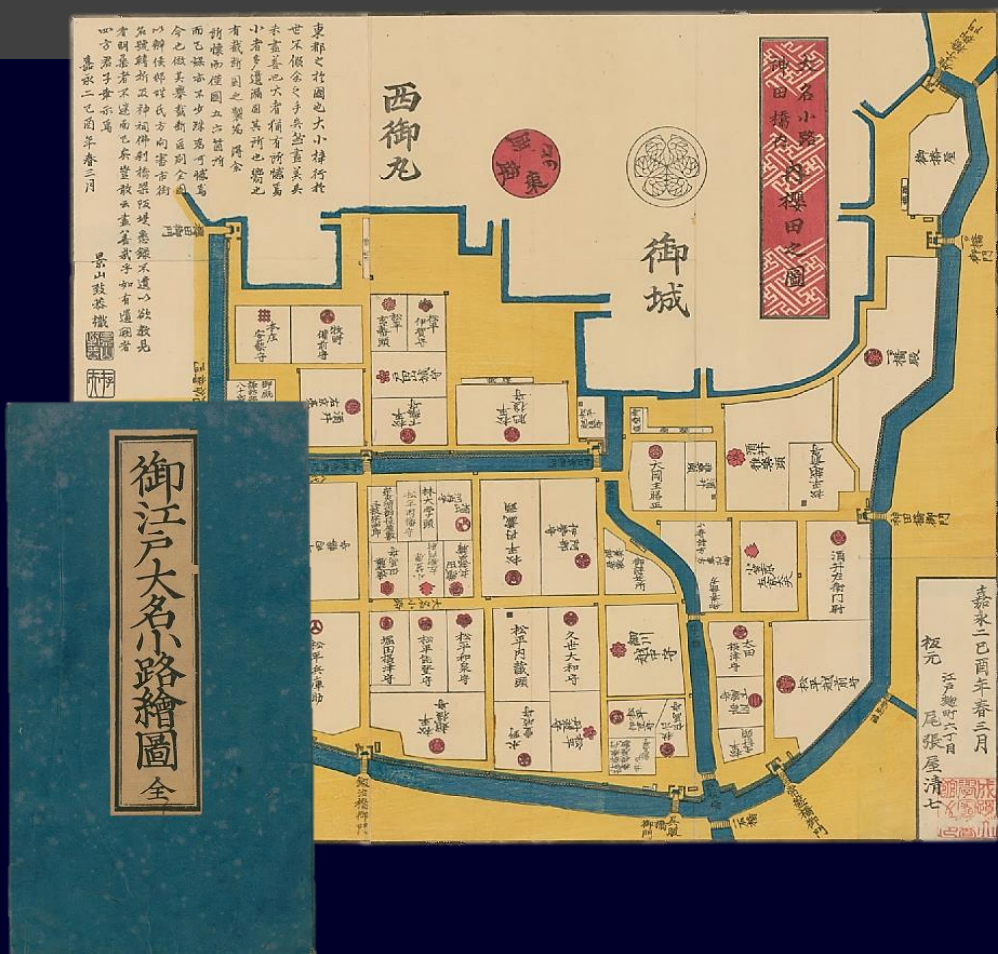
出版:尾張屋清七

出版年:① 嘉永2－文久2 (1849－1862) ② 嘉永3－元治1 (1850－1864)

出版地:江戸 (日本)

① 折畳仕立て 29舗 17.0×9.0 cm (折畳)

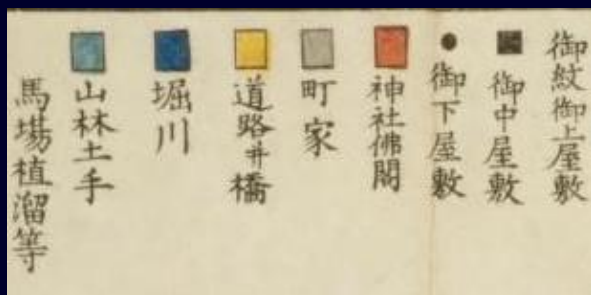
② 折畳仕立て 28舗 17.0×9.0 cm (折畳)



江戸切絵図の中で最も有名なのが尾張屋板である。堂号は金鱗堂、屋号は尾張屋であるが、一般的には尾張屋板と呼ばれる。嘉永2年（1849）、近吾堂板の成功を見て、絵草紙商の尾張屋も切絵図の販売を開始した。出版には関係あるとはいえ、もともと尾張屋も地図専業ではなかった。尾張屋板は近吾堂板との差別化を図ったのか、川や海が青、道路が黄、土手や畑が緑、武家地が白、神社仏閣が赤、町家が灰と色分けされており、色彩に富んでいた。寺院や名所などには写実的な絵も描かれており、まるで錦絵のような印象を与えるため、近吾堂板よりも人気があり、現在残っている尾張屋板の切絵図の数は近吾堂版の数倍に達する。

— 街に残された知られざる痕跡を探してみませんか？ —

地図の観方



[参考文献]

祖田浩一著, 江戸切絵図を読む, 東京堂出版, 1999.6

江戸切絵図と名所図会, 新人物往来社, 1994.12, 別冊歴史読本77号 ; 第19巻48号

江戸切絵図の世界, 新人物往来社, 1998.4, 別冊歴史読本60号 ; 第23巻第18号

切絵図にはいくつかの決まりがあり、これには各板に共通するものと、それぞれに固有のものが存在する。まず基本的に、赤が神社と仏閣、白が武家屋敷、グレーが町家といったように、寺社・武家屋敷・町屋などが色分けされて作られている。また、町名は江戸城の方向を頭にして書かれており、坂の名前は頭文字が坂の上側となる。近吾堂板では、川の名前は上流から下流に向かって書かれ、上屋敷、中屋敷、下屋敷は文字で記されており、更に辻番所に□、里俗地名に○、坂には△の記号が付されている。尾張屋板では、川や海が青、道路が黄、土手や畑が緑、武家地が白、神社仏閣が赤、町家が灰と色分けされており、大名の上屋敷に家紋、中屋敷に■、下屋敷に●の記号が付されている。屋敷の人名がデタラメの向きで書かれているように見えるが、これは頭文字が書かれている側が門となっている。これは武家屋敷だけでなく、寺社についても同様である。



虫譜

[チュウフ]

書写地:不明 書写者:不明 書写年:江戸後期
折帖 2冊 22.0×26.0 cm

栗本丹洲（1756－1834）が描いた虫類の彩色図説。日本で最初の虫類図譜として名高く、『千虫譜』とも呼ばれる。『栗氏虫譜』『丹洲虫譜』の題をもつ資料も少なくない。自序は文化8年（1811）だが、没する直前まで描き続けられた。観察により生きた特徴を捉えた彩色図に、名前の由来、方言、生態、利用法など丁寧な解説が付けられており、現代で言えば生態図鑑的な図譜である。扱われる虫類は昆虫が主体であるが、当時の分類概念に従い、昆虫以外の節足動物をはじめとする無脊椎動物、小型の脊椎動物、更には昆虫寄生菌類（冬虫夏草）まで含まれる。しかし、配列に分類配慮は無く、雑然と並べられている。図は正確かつ科学的であり、江戸時代の博物学が既に動物学にまで歩を進めたことを示すに足るものと評される。転写本が次々に作られ、現存写本も数多いが、所収品数や配列は資料ごとに異なり、転写図の巧拙は更に違いが著しい。一方、原本は残念ながら既に失われている。





— この世はヒト知れぬ生命に溢れている —

栗本丹洲 (1756-1834)

[参考文献]

東京大学附属図書館, 虫

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2011/mushi.html>), 20161012

国立国会図書館, 栗氏千虫譜, 解題

(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287019>), 20161012

名は昌臧（まさよし）、通称瑞見、号を丹洲という。田村派本草学者の総帥で、江戸における代表的な博物学者として著名な田村藍水の次男。幕府の医官であった栗本家の養子となり、幕府の奥医師をつとめ、幕府医学館で本草学を講義し、すぐれた動物学的業績を残した。晩年には医官の最高位に叙せられている。また、本草学の講義、薬物の鑑定を長く続ける一方、魚、鳥、虫などの図譜を著した。『千蟲譜』は彼の著作では唯一知られている虫類の図譜である。動植物のなかで虫類についての書物が乏しかったため、自ら作成することを決意し、18年をかけてこれを完成させたという。なお、丹洲の元からは、やがて「赭鞭会（しゃべんかい）」という博物学同好者のグループがつけられた。画技にすぐれ、その写生画はシーボルトによって海外にも紹介された。

— テーマは月と恋。特異な能力を持つ者たちのカードバトル。 —



東北院職人歌合

[トウホクイン ショクニン ウタアワセ]

書写地:不明 書写者:不明 書写年:江戸後期

巻物 1軸 25.7×1152.7 cm

職人歌合は歌合と言う形式で、各職人が左方と右方に分かれて対になり、それぞれが和歌を詠み、同じく職人である判者が優劣を判定する。「東北院職人歌合」は建保2年（1214）の中秋十三夜、東北院に集まった職人が貴族階級の遊びをまねて歌合をしたという設定でつくられた。様々な写本が存在する中、本学所蔵の本書は江戸後期に作成されたものである。「月と恋」を題とし、経師を判者に、医師－陰陽師、佛師－経師、鍛冶－番匠、刀磨－鋳物師、巫女－盲目、深草－壁塗、紺搔－筵打、塗師－檜物師、博打－舟人、針磨－数珠引、桂女－大原人、商人－海人といった24種の職人が詠んだ歌と様子が描かれている。洒脱な速筆に淡彩を施す略画風であるが、表情は個性的で各職人の風貌をよく捉えている。絵巻は日本独自の美術様式の一つで、上代から中世にかけて流布した物語・説話などを文章と絵によって表現し、巻物に仕立てられて保存・鑑賞された。

[参考文献]

職人歌合 / 網野善彦著.-- 平凡社; 2012.5.-- (平凡社ライブラリー ; 763).

村重寧「東北院職人歌合絵」『日本大百科全書』

JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (20161011)

請求記号:911.18/とう 資料番号:2007114289



— 短冊・イズ・ビューティフル。まるで水彩の万華鏡。 —



名家短冊帖

[メイカ タンザクチョウ]

書写地:不明 書写者:不明 書写年:弘化3(1846)序

折帖 1帖 40.3×18.5 cm

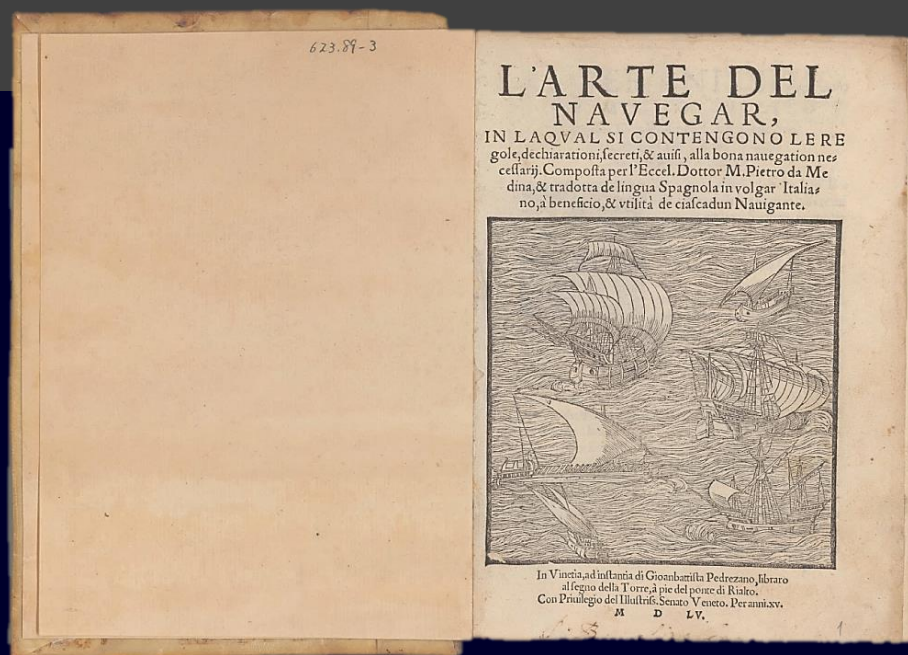
各地で活躍した著名な歌人、俳人の和歌・俳句など255枚の短冊を貼り込んだ折帖である。「短冊」は和歌などを書くために用いられた縦長の料紙で、鳥の子紙や画牋紙などを用いる。補強のため厚紙を貼り合わせたものも多い。縦36センチ×横6センチほどで、横幅が全紙の1/8の大きさにあたる。天に藍色、地に紫の繊維を漉き込んだ内曇料紙や、全体を染めたものに下絵・地模様を描いたもの、金銀切箔・砂子で装飾を施したものなどが用いられる。『名家短冊帖』はバラエティ溢れる短冊を多数収めた一品であり、見るものの目を愉しませてくれる。短冊の天部に穴が開けられているものは、実際に歌会などで使用されたものである。寛政期における京都四大歌人のひとりである「澄月」による和歌短冊や、「上田秋成」「大田南畝」「加藤千蔭」の名も見受けられる。歴史上の人物のなかには短冊にのみ真跡を残した者も多く、書道史における短冊と短冊帖の価値は非常に高い。

[執筆協力]
石澤一志 (国文学研究資料館特定研究員)

[参考文献]
デジタル大辞泉, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2016-10-11)

請求記号:911.08/めい 資料番号:2006111500





航海術 L'Arte del Navegar

著者:ペトロ・デ・メディナ (Pedro de Medina)

出版者:G.B.ペドレザーノ (G.B.Pedrezano)

出版年:1555年 出版地:ヴェネツィア (イタリア)

4折判 1冊 20.3×15.0 cm

ペドロ・デ・メディナ（1493ー1567）は、聖職者でありながら生涯にわたって航海術に関心を抱き、その近代化に多大な影響を与える書物を多く残したことで名高い。彼は、航海士・水先案内人の試験官も務め、資格を得るには最新の天文学と数学を踏まえた航法理論を習得することを必須とするように尽力した。1545年にスペインで出版された『Arte de navegar』は、蘭・仏・伊・英で20種類以上の翻訳書が出版され、半世紀以上にわたって売れ続けた（展示されている本学所蔵本は1555年発行イタリア語版）。この本の内容は、天測を用いずに、羅針盤と航海記録によって位置を測定していた従来の古典的な航法理論に新風を吹き込むものとなった。翻訳されて広くヨーロッパに伝わった航海術の進歩は、各国が新たなアジア・アメリカへの商用海上ルートを確立させることを促し、結果的に莫大な富をヨーロッパにもたらすことになるのである。

[参考文献]

The Oxford encyclopedia of maritime history /

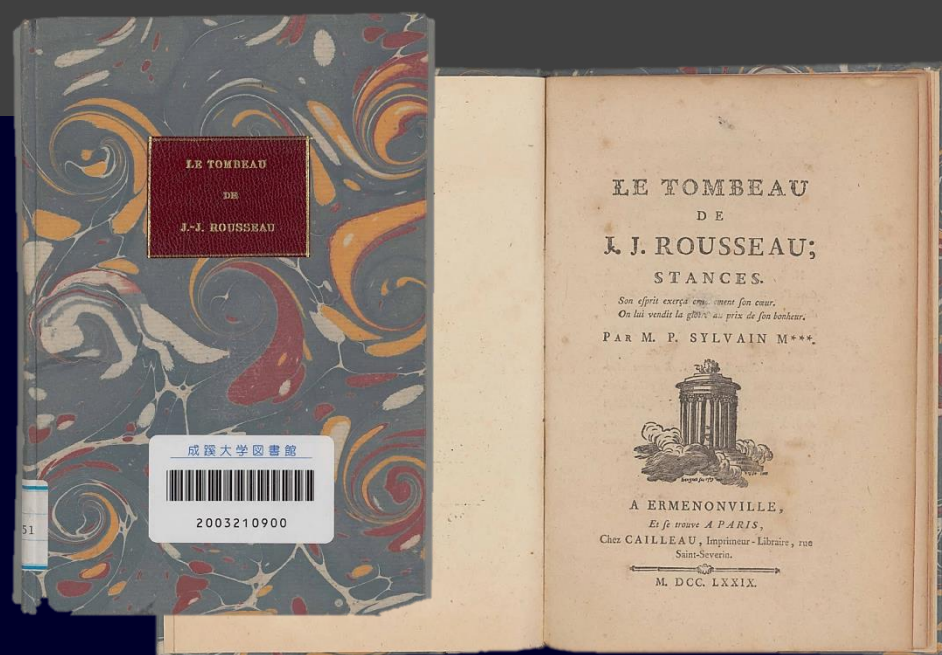
John B. Hattendorf, editor in chief ; : set - v. 4.-- Oxford University Press; 2007

『成蹊大学図書館所蔵稀書解説目録』

請求記号:623.89/3 資料番号:2000400380



— ルソーはもはやいない！涙しよう！ —



ルソーの墓

著者:シルヴァン・マレシャル (Pierre Sylvain Maréchal)

出版者・印刷者:カイヨー (Cailleau)

出版年:1779年 出版地:エルムノンヴィルおよびパリ (フランス)

8折判 1冊 18.9×12.4 cm

シルヴァン・マレシャル（1750ー1803）は作家でジャーナリスト。最初弁護士となったが、吃音のために文学の道に進んだ。1770年にマザラン学院の副司書となるが、1784年に聖書を風刺した廉でその職を失う。フランス革命が到来するとプロパガンダ活動に携わり、特に1790年以降、プリュドムの新聞『パリの革命』の編集協力者となった。

『ルソーの墓』は、マザラン学院の副司書の職にあったときに書かれたものであり、ルソーの死（1778）からまもない時期にルソーへの賛辞が詩の形で綴られている。当時マレシャルは、ギリシャ・ローマの古典やルソーの作品に傾倒し、金持ちや不平等を批判したり、素朴な田舎生活への回帰を説く作品を書いており、神に対する懐疑や半宗教的な言説はまだ全面には出ていない。この本には、無神論者マレシャルではなく、民衆を擁護し、金持ちや不平等を批判した有徳の人ルソーをたたえるモラリストとしてのマレシャルが色濃く表現されている。

[参考文献]

『成蹊大学図書館所蔵稀書解説目録』

請求記号:194/4*Ma51 資料番号:2003210900

